

中国甘肅省臨夏市の 回族女性の生き方に関する研究

—自営業のM1さん、臨夏中阿女校の職員M2さん、看護婦Wさんの事例から—

金 仙 玉

1. はじめに

全世界を震撼させた同時多発テロの結果、世界各国ではイスラームに対する興味がにわかに高まり、イスラーム女性問題についても注目され始めてきたが、それは中近東のイスラーム女性の問題が中心であり、中国イスラーム女性の実態はあまり知られていない。中国では2000万人のムスリムが住んでおり、実はあまり知られていないイスラーム大国である。中国イスラーム女性は現在どういう生活を送っており、いかなる問題を抱えているのか、またどんな考え方を持っており、どんな生活を送りたいと願っているのか。

本稿では、人口が最も多く、影響も大きく、漢語を使用している回族⁽¹⁾を事例として、中国イスラーム女性の生き方について考えていき、中国イスラーム女性の現状を明らかにしたいと思う。具体的には、中国のメッカと呼ばれるイスラーム信仰の厚い甘肅省臨夏市⁽²⁾を調査地として、個人のライフヒストリーからみた回族女性の生き方について検討したい。調査対象としては、商売人、イスラーム女子学校の職員、看護婦というイスラーム社会で勤められる職に勤めているM1さん、M2さんとWさんを選ぶ。三者

(1) 回族はよく中国のムスリムと説明されるが、厳格には中国のムスリム全てが回族ではない。中国にはイスラーム教を信じる民族が10あり（他にテュルク系のウイグル・カザフ・キルギス・タタール・ウズベク・サラル族、イラン系のタジク族、モンゴル系のトンシャン・ボウアン族）、回族はその中の一つに過ぎない。回族は服装、顔付きと言葉では漢民族と全く区別がつかない。人口は2005年の時点で981万6805人であり、壮族、満族に次ぎ、三番目に多い少数民族であり〔中華人民共和国国家統計局 2006：50〕、中国最大のムスリム集団である。主に寧夏回族自治区に集中的に居住し、甘肅省、河南省、新疆省、青海省、雲南省、河北省、山東省などの地域に規模は異なるが集中的に居住している。

を選択した理由は、三者の従事している仕事の内容の異なりから、三者のライフヒストリーや社会的地位などはかなり異なっており、したがって、回族女性の生き方の多様性を示すことができると考えたからである。

M1さんへの調査は2007年5月3日に彼女の自宅で、M2さんへの調査は2007年5月14日に彼女の職場で、Wさんへの調査は2008年3月23日に彼女の職場で行なった。3人への調査ともインタビューの形で行ない、インタビューの内容は、生育史、教育、職業、結婚及び家庭生活、夫婦関係と女性観、子育て、日常生活である。インタビューの時、一人の調査にあたり、かかった時間は2時間半ぐらいであり、インタビューの内容は調査対象者の了解をとったうえで、録音機で録音した。インタビューとアンケートの使用言語は中国語である。

本稿の目的は二つある。まず、一つ目はM1さん、M2さんとWさんのライフヒストリーからみた回族女性の生き方について考察し、三者のライフヒストリーについて意味付与分析を行なうことである。もう一つは、上述の3名の回族女性のライフヒストリーにみられる共通点について考察することである。本稿を通して、中国イスラーム女性の現状を明らかにするとともに、ライフヒストリーの視点からの研究が十分でなかった回族女性研究を一步進めたい。

最初に自営業のM1さんの事例、次に臨夏中阿女校⁽³⁾のM2さんの事例、最後に看護婦のWさんという順番で3人の人生について論述し、そのライフヒストリーについて分析を行なう。ここで取り上げる事例は宗教観に基づくものではなく、現実に家庭の中の人間関係を中心として考察したものである。

(2) 臨夏市は甘肅省臨夏回族自治州の県級市の行政中心で、臨夏回族自治州の中部、甘肅省の南部に位置している。イスラーム教徒である回族や東郷族が多く住んでおり、長い間「中国の小メッカ」と呼ばれてきた。臨夏州人民政府のホームページによれば、臨夏市の総面積は88.55km²であり、総人口は19万3000人で、人口の約半分が回族である（2008年9月18日閲覧）。2003年、臨夏市のGDPは7.72億人民元で、一人当たりGDPは3938人民元である。同年、甘肅省の一人あたりGDPは5022人民元であり、全国平均一人当たりGDPは9101人民元である〔中華人民共和國国家統計局 2004：53, 63〕。上述の比較から分かるように、中国の経済ランキングで甘肅省は低いレベルにあり、臨夏市は甘肅省の中でも経済的に遅れているところである。

(3) 中阿女校とは中国語とアラビア語で教えるムスリム女性のための宗教学校を指す。

2. 自営業のM1さんの事例 —「私の人生はなぜこんなに辛いのか?」

2.1 生育史と教育

1944年に臨夏市の回族家庭に生まれる。両親とも非識字者であり、父親は商売人で、母親は専業主婦である。男子3人、女子4人の7人兄弟のうち、二番目に生まれたM1さんは幼い頃から妹や弟の世話をしてきた。学校教育を受けたことがなく、自分の名前さえも書けない。幸いに小学校に通ったことのある弟から簡単な数学知識を教えられ、足し算と引き算はできる。結婚まではずっと家の中におり、母親から炊事や掃除や裁縫などの家事を習ってきた。

2.2 結婚及び家庭生活

18歳の時に仲介人の紹介で10歳年長の夫(回族)と結婚することになる。結婚前に夫の顔を見たことがなく、M1さんにとって夫は父親と兄弟以外では最初に出会った男性である。夫は非識字者で、正式な仕事がなく、建築現場で砂やレンガを運搬するなど肉体労働に従事した。建築現場の労働者の収入はとても低く、しかも臨時に雇用された労働者なので、収入も安定していなかった。生計のため、M1さんも夫と同じ建築現場で働いたが、両者の収入は少なく、貧困による口喧嘩が多かった。

結婚直後の20年間は姑及び舅と同居していたが、当時家庭で権力を握っていたのは姑であった。姑はM1さんに厳しく、仕事から帰っても色々家事をさせた。そのうえ、義理の妹さえ自分の母親と一緒にあって、M1さんをいじめた。姑はM1さんが遅く帰る時には自分がお飯を作るが、いつもM1さんの分を作らないため、M1さんはよく飢餓の状態になっていたという。

結婚20年後やっと夫、子供とM1さんからなる核家族になり、M1さんが家庭の経済権を持つようになる。その時は娘が家事を手伝ってくれて、家事の圧力はなく、息子も稼いだお金を全部M1さんに渡したので、M1さんは当時の生活に比較的満足していた。しかし、M1さんが満足を感じた生活は長く続かず、数年後の息子の結婚により破壊された。

息子は結婚してからお金を自分の母親に渡すことがなく、全部自分の妻

に渡している。毎月の生活費を嫁からもらわなければならないが、これは恥ずかしいことで、M1さんは息子に自分の希望を言ったが、息子に断わられたため、息子夫婦を家から分家させた。娘の結婚と息子の分家に伴い、夫との二人きりの生活になるが、夫はお金を稼ぐ方法について全く考えなく、M1さんにすべてを頼っていた。M1さんは夫の無能力によくため息が出ており、自分の不幸を考えるとよく涙が出てくるという。夫は2007年3月になくなったが、夫の死亡についてM1さんは特に悲しさを感じていないようである。

2.3 夫婦関係と女性観

結婚当初は夫についてよく知らなかったので、夫について特に不満を感じていなかった。しかし、時間が経つにつれて、夫の欠点がだんだん暴露し始め、結婚数年後からは夫について不満が多くなり、結局夫婦関係がとてもし緊張するようになった。夫は家族を養う能力がないのに、亭主関白で、家事を全然手伝ってくれない。M1さんは女性なら家庭内にいるべきだと思っており、女性にとって理想的なのは家庭内で家事や育児をすることだと思っている。しかし、夫に経済力がないので、仕方なく外に出て働いている。そのうえ、家に帰っても家事や育児等を全部一人でしなければならず、いつも疲労を感じている。男に家族を養う能力がなければ、妻に優しく、家事や育児等を分担してくれればそんなに不満はないのだが、夫は家庭内のことは一切手伝ってくれないので、夫が嫌になり、よく喧嘩するようになったという。

2.4 子育て

1966年に双子の息子を産み、1969年には長女、1972年には次女を産んだ。4人の子供の出生・成長期間は姑と一緒に暮らした時期だったため、姑が子供の世話の手伝いをしてくれた。4人の子供は小学校を卒業してから学校をやめた。経済的に苦しいこともあるが、子供たちも勉強に興味を持ってなく、自ら学校をやめた。M1さんは子供たちが良い教育を受けることを期待していたが、勉強に興味を持ってない子供たちに学校に通うことを強制することはできないと思っていたので、特に反対はしていなかった。彼女

の息子への期待は将来自分の家族を養う能力を持つことで、娘への期待はよい相手を見つけて結婚することであった。もちろん、娘に仕事能力があれば、社会に進出して構わないと思っている。

宗教知識に関しては、わざわざ教えたことはないが、普段自分が礼拝をするなどイスラームの規定に則った生活を送っているため、子供たちも自然に学んでいき、イスラームのタブーを守れると思っている。ただ、4人の子供とも礼拝をあまりしないので、それは少し気になるという。

2人の息子は学校をやめてから、叔父が経営している飲食店で手伝い、2人の娘は家で家事を手伝っていた。1991年に長男が結婚し、翌年に次男が結婚した。現在2人の息子とも羊の皮や牛の皮の商売をしている。臨夏市には羊や牛の皮が多く、安い値段で購入し、大都会で高い値段で売る。商売はうまくいき、年収は2万元ぐらいになる。長女は1987年に結婚し（当時18歳）、次女は1992年に結婚した（当時20歳）。長女は専業主婦で、婿は商売人である。婿の学歴は高校卒業で、裕福な家庭で生まれた。現在毛皮の商売をしており、毛皮関連の商店をいくつか開いている。年収が数十万円で、経済的にとても恵まれている。長女は美人で、婿は長女的美貌に惚れて、結婚を申し込んだという。次女は母親の下着専門店を受け継ぎ、下着の商売をしている。婿の学歴は高校卒業で、政府機関で一人っ子政策に関する仕事に従事している。

長男夫婦と3年間、次男夫婦と1年間同居したことがあるが、嫁との関係がよくなかったため、彼らを分家させた。2人の息子とも自分の妻に忠誠するタイプで、稼いだお金を全部自分の妻に任せており、結局嫁が家で権力を持つようになる。M1さんはこのことに不満を感じており、息子及び嫁と喧嘩したことがある。自分が姑と同居したときに、経済権を握っていたのは姑で、姑に色々なじめられたが、自分が姑になったら今度は嫁にいじめられることが悲しい。

分家してから2人の息子は親の扶養義務をあまり果たさなく、生活費もあまりくれない。開斎祭の時に、会いにくるが、普段は全然来ない。2人の息子と異なって、2人の娘は親孝行で、毎月母親に生活費を渡すだけでなく、日頃から親の面倒を見ている。子供についてM1さんは、「昔は息子が親の老後の面倒見をしたが、今は時代が変わり、娘が親の面倒見をする

ケースが多いです。息子は嫁をもらったら自分の母親を忘れてしまうので、今の時代は娘を生むほうがもっといいですよ。」と語っている。

2.5 職業

夫の収入が少なかったため、結婚後に夫と一緒に建築現場で肉体労働に従事した。砂やレンガの運搬作業は女性にとって辛い仕事で、余程の力がないと一人で運搬できないという。一人で運搬できない時には夫が手伝ってくれるが、やはり疲労を感じており、現場で倒れたこともある。何回もやめようと思ったが、夫の収入が少なく、子供も多いことを考えて、仕方なく続けたという。

19年前（1988年）から下着専門店の経営を始めた。毎月の収入は安定しておらず、収入の良い月には400元ぐらいになるが、収入の悪い月には200元ぐらいしかない。入荷や販売まで全部一人でしており、夫は何も手伝ってくれなかった。夫は礼拝をしたり友達とお喋りしたりするだけで、一日何の仕事もしていなかった。当時、M1さんは毎朝5時半に起き礼拝をし、それから炊事をする。8時になると店に行き、一日の営業を始める。夕方7時に帰宅して、夕食を作る。食事や礼拝が終わったら10時になり、それから寝る。十数年間ずっとこのような生活を送ってきたので、とても疲れたという。今は娘からの経済援助があるので、下着専門店の仕事をやめて、家でのおんびりしている。一日5回の礼拝をしたり、自分の妹の家に遊びに行ったり、友達とおしゃべりをするなど、前には送れなかったゆとりある生活を過ごしている。

2.6 考察と分析

以上、M1さんのライフヒストリーについて見てきた。中華人民共和国が成立する前に生まれたM1さんは学校教育も受けられなく、小さいときから家事を覚えてきた。しかし、これは彼女だけに見られる現象ではなく、その時期に生まれた回族女性さらに中国女性の中でもよく見られる。M1さんが入学年齢に達した時期は中華人民共和国が成立した直後で、民衆は戦争と混乱からくる貧・窮・弱の苦しみを味わってきた。この時期において、女性はもちろん、男性も教育を受ける機会が少なかった。また、

伝統的觀念に基づく家制度が存続したため、女性に求めるのは良妻賢母で、したがって女性への教育は将来他家に嫁いでも恥ずかしくないぐらいの家事技術の伝授であった。

伝統的觀念とマッチし、M1さんは結婚後専業主婦になることを希望していたが、夫に経済力と能力がなかったため、仕方なく社会に進出した。知識を持っていないため、M1さんが就ける仕事は建築現場の労働者など肉体労働であった。M1さんは過重な労働に加えて、姑と義理の妹のいじめにじっと耐えながら生きてきた。核家族になってから暫く幸せな生活を送ることができたが、息子が結婚してからはまた不幸な生活を送るようになった。息子は母親より自分の妻を大事にしており、稼いだお金を全部自分の妻に渡している。姑になっても家庭の経済権を握れなかったM1さんは悲しいあまり、息子夫婦を分家させた。40歳を過ぎてから下着専門店を経営し始めたが、経営に関するすべてを一人でしなければならなく、しかも家事も一人で担当してきた。

ここで、回族の伝統的な家族倫理思想を用いてM1さんの生き方を見てみよう。明代の末から清代の初まで、王岱輿、馬注、劉智などの回族出身者の倫理思想家たちは儒教思想を用いてイスラームを解釈する運動を起こし、イスラームの中国化を促進した〔敏 2007:32〕。彼らの家庭における倫理思想の内容は大まかに言うと、夫婦間の倫理は「夫が妻を養い、妻は家事をこなし、常に補助的な役割を果たす。夫は妻を教育し、妻は夫に従う」であり、親子間の倫理は「親は子供を扶養・教育し、子供は親に孝養する」であり、兄弟間の倫理は「兄は寛容なる精神で弟と付き合い、弟は兄に我慢しなければならない」である〔梁 2007:38-40〕。

その後の1900年代初の清末から1940年代の民国期に回族社会ではイスラーム新文化運動が起こったが、その運動の出発点は、回族が生き残るための方策を探索することであり、上述の明末清初の王岱輿、馬注、劉智らによる儒教的イスラーム解釈運動と本質はあまり変わらない。イスラーム新文化運動は、統一意識が希薄であった中国のムスリムを回というエスニック集団として凝集させ、回としてのエスニック・アイデンティティと中華民族としてのナショナル・アイデンティティを複合させたが〔松本 2000:100〕、家庭における倫理思想の内容を変えることはできなかった。

1949年の新中国の成立、さらには1978年の改革開放を経て、中国社会では男尊女卑思想がほぼなくなり、女性の地位は著しく向上されたが、それは都市部や経済的に発展している地域的女性に限っており、農村部や貧困地域では今もなお昔からの慣習に縛られて生きている女性が多い。臨夏市は都市部に含まれているにも関わらず、経済的に遅れているところであり、東南沿海地域と比べると比較的に封建的な地域である。特に近年のイスラーム復興運動の影響で自文化を見直し、自文化への帰依を望んでいる臨夏市の回族社会では伝統的な性別役割分担の意識が強い。

このように、臨夏市の回族社会において夫が妻を養い、子供が親に孝行するという考え方はごく一般的なものである。しかし、M1さんの場合、夫に養われるどころか、夫を養い、しかも息子から孝行されることもなかった。文句があったにも関わらず、M1さんは仕事と家事を一人でしてきた。M1さんの事例は臨夏市の回族社会において稀なケースではあるが、ここから回族女性のたくましさの一面が見られる。今までの回族女性研究の中では、生活の面において夫に頼らなければならぬ弱い像が多かった⁽⁴⁾が、それは夫に家族を養える能力があることを前提としていた。しかし、夫に家族を養う能力がない場合、回族女性も強くなることがあり、自分のパワーを発揮して頑張りに生きているのではないだろうか。

3. 臨夏中阿女校の職員M2さんの事例 —「優しい夫に出会ってよかった」

3.1 生育史と教育

1957年に広河県の回族家庭に生まれる。父親は薬剤の商売人で、文化大革命までは経済的に裕福だったが、文化大革命が始まってから父親は「走資派（資本主義の道を歩むもの）」として批判され、商売ができなくなり、経済的に苦しくなった。当時、父親は自己批判を強要させられ、「批闘大

(4) 例えば、蔽の「男が外向きを担当し、農業、工業、商業などを営み、家族の生計を掌握する。女は内向きを担当し、家事の切り盛りや子供の世話をする」[蔽 1986:87]という記述と、馬&虎&張の「夫が大きな権威を持っており、一切の事柄を決めることに對し、妻は発言する権利がなく、黙々と家事ばかりしている」[馬&虎&張 2004:154]という記述から多くの回族女性は夫にリードされ、家庭内に閉じこめられる生活を送っていることがわかる。

会」と呼ばれる吊るし上げが日常的に行なわれた。そして1969年に父親は農村に送られ、労働改造を受けさせられた。当時小学校5年生だったM2さんも父親と一緒に農村に行ったため、小学校を中退せざるを得なかった。兄1人と姉1人がいるが、2人とも文化大革命の影響で学業を続けられなく、中学校を中退した。父親が解放され、里帰りができたのは1976年のことであった。

3.2 結婚及び家庭生活

19歳の時に仲介人の紹介で、15歳年長の夫と結婚する。夫は清真寺（モスク）のアホン⁽⁵⁾で、1997年に病気で亡くなった。夫は学校教育を受けたことはないが、清真寺で宗教知識を学んだことがあり、清真寺での勉強を終えた後に清真寺に残りアホンになった。夫は優しい人で、自分が仕事を持っているにも関わらず、家事や育児等を手伝ってくれた。しかも毎月の収入を全部妻に渡し、家計管理も妻に任せていたので、夫にとっても満足していた。さらに、M2さんが夫と結婚した当時、夫の両親はもうなくなり、姑・舅との共同生活から来る悩みを抱えたことがない。

夫との結婚生活において一番印象に残ることは、1991年のメッカ巡礼である。当時巡礼するには一人で7000元ぐらいかかったが、夫は気前がよくて、M2さんも連れて行った。しかし、M2さんは気候と飲食が合わなかったため、病気にかかり、結局入院することになった。メッカ巡礼では、タワフ⁽⁶⁾や石投げなどの儀式を行わなければならないが、M2さんは病気のため、これらの儀式を全部車内で行なった。そのとき、夫は親切にM2さんの世話をしてくれたので、M2さんはとても感動したという。

現在息子夫婦と同居している。嫁は性格がよく、あまり怒らないタイプで、家族関係が睦まじい。嫁が家事を全部やってくれるため、M2さんは家に帰ればラックスできる。M2さんは神経質なため、学生の態度が良くないときにはいらだって、家に帰ったら嫁に怒ったりする。それでも、嫁は黙っているので、喧嘩にはならない。今もM2さんが家計を管理して

(5) 広義にはイスラーム法学・神学に通じる人を示すペルシア語。中国のイスラーム教徒の間では、アホン（阿訇）は宗務者の位階の一種で、清真寺の教長になる資格を有するものをいう。

(6) タワフとは、メッカに着くとすぐにカアバ神殿の周りを7回巡ることを指す。

おり、息子は毎月の収入を母親に渡している。家庭の共同支出はM2さんが払っており、日常生活用品もM2さんが買ってくる。もちろん、M2さんは毎月嫁に小遣いとして300元をあげて、嫁の好きなものを買わせている。

3.3 夫婦関係と女性観

夫は楽観的で、心の広い人で、夫が在世していた間、2人はあまり喧嘩したこともなく、夫婦関係がとても良好だったという。夫は宗教教育を重視しており、妻に宗教教育を受けることを勧めた。1988年からの四年間、臨夏中阿女校でアラビア語を学んだことがあるが、それは夫の勧めによるものである。臨夏中阿女校での勉強が終り、当校の校長に後方勤務を頼まれたが、夫は反対せず、M2さんの社会進出を支持していた。

女性の役割について、M2さんは女性なら家事や育児等の家庭内のことを担当すべきだと思っているが、女性の役割は家庭内だけにあるとは思っていない。毎日家の中で掃除や炊事等をするのはつまらないし、社会事情が分からなくなる。仕事をするようになるだけではなく、経済的に独立できるので、経済的地位が高い。しかも、専業主婦より社会に出て働く女性の方が社会及び宗教への貢献が大きい。そのため、M2さんは娘及び嫁の社会進出に賛成している。娘は現在マレーシアに留学中であるが、留学を終えたら帰国してアラビア語教育関係の仕事に従事してほしい。嫁は今は幼児を持っているので、社会に進出できないが、子供が少し大きくなったら社会に出て働いてほしいと語っている。

3.4 子育て

1981年に息子を産み、1985年に娘を産む。子供が幼い時にM2さんは専業主婦だったため、特に苦勞せずに子供を育てることができた。子供が物事が分かり始めてから仕事を始めたが、仕事の退勤時間が早かったため、育児には大きな影響はなかった。ただ子供2人ともにいい教育を受けさせたかったが、息子は勉強に興味を示さなく、自ら高校進学をやめたので、少し遺憾に思っている。

息子は中学校を卒業してからタクシー運転手になる。2005年に3歳年下

の回族女性と結婚し、翌年に男の孫も生まれる。嫁は中学校学歴で専業主婦である。娘は高校入学試験に落ちた後臨夏中阿女校に通い始め、四年間の勉強を終えた後には母校に残り、一年間教師を勤めた。19歳の時に結婚し、結婚後はパキスタンで3ヶ月間留学し、その後はマレーシアで留学するようになる。マレーシアでは一年間以上生活しており、今はマレーシアでの生活にすっかり慣れたという。婿は中学校を卒業してから蘭州市でタクシー運転手になっている。数ヶ月前から蘭州市の中阿学校でアラビア語を学ぶようになり、アラビア語の勉強を終えたらマレーシアに行き、妻と一緒に暮らす計画である。

3.5 職業

1988年—1992年に臨夏中阿女校でアラビア語を学ぶようになり、1992年9月からは臨夏中阿女校の総務処で後方勤務に従事するようになる。仕事の内容は、主に学生の宿舎の衛生と学生の紀律を管理することである。例えば、各宿舎の衛生が良くできているかどうかをチェックし、よくできていない宿舎には改めて清掃をさせたり、大声で話す学生に会ったら静かにするよう注意させたりする。臨夏中阿女校の学生たちは全般的に見ておとなしいほうであるが、たまにはいたずらの学生も見られる。いたずらの学生に会うときには、1992年から今までの優秀な学生の物語を言ってあげるが、ほとんどの学生は聞いたあと、直ちに自分のことについて反省する。毎日若い学生たちと接触するため、自分の心も若くなり、自分の仕事が好きである。学生たちに紀律正しさと清潔の重要性を教えることを通じて、自己価値を認識でき、社会や宗教に役立つことをしていると思うと嬉しくなるという。

3.6 考察と分析

以上、M2さんの生き方についてみてきた。経済的に豊かな家庭で生まれたM2さんは、文化大革命の時代に変な経験をしたが、経済力があり、心も優しい夫に出会い、結婚後には幸せな生活を送っている。M2さんの夫は稼いだお金を全部妻に渡す一方、家事や育児の手伝いをしてくれた。自分自身が宗教指導者であることと関連があるかどうかは分からないが、

彼は妻が宗教知識を学び、宗教知識の伝播関連の仕事に従事することを支持した。夫が死亡した数年後に息子も結婚し、M2さんは息子夫婦と同居するようになるが、新しく構成された家庭においても尊敬され、孝行されており、しかも経済権を握っている。M2さんは自分の生き方に満足しており、生活に生き甲斐を感じている。

このようにM2さんが幸せに暮らすことができたのは、優しい夫との出会いと関連があると思われる。臨夏市の回族社会には伝統的な役割分担の思想が生きており、男性は家族を養うべきだが、家事や育児等は手伝わなくてもいいと思う人が多い。しかも、夫婦の間で発言権と支配権を持っているのは夫である家庭が多い。しかし、臨夏市の一般の回族男性特に旧中国に生まれた回族男性と異なって、M2さんの夫は妻を養うばかりではなく、妻を大切にし、妻を尊敬していた。M2さんの夫が妻をこんなに大切ににした理由には、彼の性格が優しいことと、妻より年がはるかに上であること、彼の勤めた職種がアホンということが推測できる。

M2さんの夫は清真寺のアホンで、イスラーム教に詳しく、豊富なイスラーム知識を持っている。ムスリムたちにイスラームの文化や伝統を教える立場にある彼は、自分自身が見本になっていなければならない。一般的に、イスラーム社会における夫婦関係は、夫が家長となり、家族のあらゆる事柄を管理し、主導権を握っていると理解されている。イスラームは夫に高い地位を与えたのは事実であるが、妻を大事にし、幸せにしてあげ、妻の愚痴を聞くなど妻への義務も規定している。

例えば、『クルアーン』には「出来るだけ仲良く、かの女らと暮しなさい。あなたがたが、かの女らを嫌っても（忍耐しなさい）。そのうち（嫌っている点）にアッラーからよいことを授かるであろう。」（第4章 19節）、「またかれがあなたがた自身から、あなたがたのために配偶を創られたのは、かれの印の一つである。あなたがたはかの女らによって安らぎを得るよう（取り計らわれ）、あなたがたの間に愛と情けの念を植え付けられる。本当にその中には、考え深い者への印がある。」（第30章 21節）とある。上述のクルアーンの言葉は、夫婦が優しい情愛によって結ばれるべきものであることを示している。宗教指導者であるM2さんの夫はクルアーンの教え通り、妻に優しく、妻を大切にしてきたのではないだろうか。そのおか

げで、M2さんも平凡であるが、生き甲斐を感じられる人生を歩んでくる
ことができたと思われる。

4. 看護婦のWさんの事例 —「責任のある仕事を任せてもらいたい」

4.1 生育史と教育

1963年に臨夏市の回族家庭に生まれる。父親は蘭州民族学院を卒業した
あと、臨夏市イスラーム協会で働き、臨夏市イスラーム協会の主任であっ
た。母親は専業主婦で、馬家軍⁽⁷⁾の主要人物である馬歩芳の設立した八坊
小学に3年間通ったことがある。父親と母親は同じ年で、2008年の年齢は
79歳である。母親は数年前になくなり、父親は弟と同居している。

兄1人と弟2人いるが、皆臨夏回族自治区に住んでいる。兄は高校を卒
業した後、下郷し農村で3年間暮らした。臨夏市に戻ってからは建築材料
工場で働き、その後は紅園社区⁽⁸⁾の事務所で働き、今は臨夏市園林局党委
書記⁽⁹⁾となっている。上の弟は東郷県計画生育委員会の副局長に努めてお
り、下の弟は西北師範大学を卒業してから臨夏州公安局で働いている。

Wさんは1970年から前河沿小学校に通い、1976年には臨夏中学校に進学
した。小学生の時代には文化大革命の時代だったため、勉強はあまりせ
ず、壁新聞を書いて先生の批判をしたりした。中学校に入ってから文化
大革命も終わり、勉強に没頭することができ、卒業する時には三好学生⁽¹⁰⁾

(7) 馬家軍は1949年まで寧夏、青海と甘肅地域を支配していた馬姓の軍団を指す。馬家軍の主要人物は寧夏の馬福祥、馬鴻逵、馬鴻賓（寧夏三馬）と、青海省の馬歩芳、馬歩青兄弟、甘肅省の馬占鼐、馬安良親子である。以上の三つの馬姓家族の本籍は、甘肅省南部の河州（現臨夏回族自治区）という町である。馬家軍は一貫して勢力維持をつとめ、中国国民党と手を組み、勢力内に侵入してきた中国共産党の西路軍や日本軍と戦った。国共内戦では国民党に味方し共産党軍と戦った〔張 1993：101-107〕。

(8) 社区とは、中国の基本的な地域社会の単位で、コミュニティとも言う。

(9) 中国共産党の中央、地方、または末端組織の最高責任者。中国共産党は官僚組織の中に限らず、企業や団体や部門などあらゆる組織に党委員会を設け、そのトップである党委書記は最高指導者として人事権、予算権など絶大な権力を持つ。各級党委書記の存在は共産党一党支配の基礎をなす。しかし、近年市場経済の導入で、党への忠誠心よりも幹部の実績が重視されるようになり、党委書記の影響は低下しつつあるとの指摘もある。

(10) 三好学生とは、徳（思想）・智（学習）・体（健康）ともに優れている学生を指す。

という称号を獲得した。しかも、臨夏中学の高校部にも推薦されたが、家庭の経済状況と父親の希望を考えて、高校に通う機会を放棄し、臨夏州衛生学校の入学試験に参加した。臨夏州衛生学校の試験に受かり、1978年から臨夏州衛生学校に通い始めたが、自分の希望ではない学校だったので、勉学に努力していなかった。自分は高校に入りたかったが、父親はWさんが衛生学校に入り、将来は看護師になることを希望していた。そのうえ、高校に通うには学費などを払わなければならないが、経済的に豊かではないWさんの家庭にとって、それは苦しいことであった。それと比べると、衛生学校に通うと学費がかからないだけでなく、毎月4元の補助金も出るのので、衛生学校に通うことを決めたのである。衛生学校に通う間、Wさんは補助金を全然使わずに、全部親に渡した。当時父親の給料が53元だったので、4元の補助金は家計に役立っていた。衛生学校の食堂ではおいしいものをよく作るが、Wさんはよく家を買っていき、親や兄弟と一緒に食べたという。

4.2 結婚及び家庭生活

23歳のときに結婚した。夫（回族出身）はWさんと同じ年で、中学生時代のクラスメートである。しかし、その時にはあまり話したことがなかったため、相手のことがあまり印象に残っていない。20歳のとき、友達の紹介で見合いをし、2人とも相手に満足したので、結婚を約束した。当時、夫の姉がまだ結婚していなかったため、夫の姉の結婚を待って、3年後に2人が結ばれた。

夫は臨夏回民中学の高校部を卒業してから臨夏市農業機械修理工場で働くようになる。しかし数年後にリストラされ、半年間家で休んでから紳士服装店を経営し始めた。現在店の経営状況は普通であり、毎月2000元ぐらいの利益を得ている。2人の収入は各自に管理しており、マンションの買取と子供の教育費用を半分ずつ支出している以外、日常支出はほとんど夫が払っている。

舅・姑との同居経験に関しては、結婚したばかりの時に同居したことがあったが、義理の弟の結婚に伴って、一年半後に分家するようになった。しかし、義理の弟は8年前に離婚しており、そのため舅と姑を自分の家に

誘い、一緒に暮らしていたという。姑は一年半前になくなり、舅も数ヶ月前になくなった。同居していたときは、姑から叱られるときもあったが、彼女はいつも聞いていない振りをするので、喧嘩になったことがなかった。

父親の影響で10年前から清真女学で宗教知識を学び始めた。平日は仕事で忙しいので、土曜日と日曜日にしか授業を受けられないが、清真女学での学習を通してクルアーンの朗読と簡単なアラビア語を話せるようになった。父親は四年前にメッカ巡礼に行き、Wさんは広州まで父親を迎えに行った。自分も将来機会があれば、メッカ巡礼を行ないたいと語っている。

4.3 夫婦関係と女性観

夫婦関係は概ね良好であるが、たまに家事と子供の教育問題をめぐって夫と喧嘩するときがある。中国では男女平等を勧めており、男性でも帰宅したら家事を手伝う者が多いが、Wさんの夫は家事をあまり手伝ってくれない。Wさんは看護婦なので、夜間に仕事をすることがあり、翌日の昼間はずっと眠たく、家事などをしたくない。こういう時には夫に家事をしてもらいたいが、あまりやってくれないので怒ったりする。Wさんも家事と育児は女性が主に担当すべきで、普段なら自分が家事と育児をしても構わないが、特殊事情がある時には夫から手伝ってもらいたいと思っている。夫はWさんの仕事を支持しており、物事を決めるときにも妻の意見をよく聞くが、息子の教育問題においては妻の意見をあまり聞かない。Wさんは息子に厳しく、幼いときからきちんとしつけをしてきたが、夫は息子にとっても優しい。1人息子なので、いつも可愛がっており、息子のわがままな要求でも聞いてあげる。しかも、息子が悪いことをして教育するときにも、夫はかばってあげるので、夫婦喧嘩になる。幸いに息子はわがままの子にはなっていないが、夫の子供への教育態度はあまり気に入らないという。

4.4 子育て

1988年に息子を出産する。その時期は夫がリストラされて、半年間家で休んだ時期だったため、出産後の半年間は夫が息子の世話をした。夫が仕事を再開してからは姑が暫く息子の面倒を見てくれて、その後はお手伝いさんを雇って息子の面倒を見させた。息子は3歳になってから幼稚園に通

い始めたが、仕事時間の自由な夫が息子の送迎を主に担当していた。

2006年に息子は臨夏中学を卒業し、西北師範大学に入学した。息子は北京航空航天大学を希望していたが、経済的原因と実力の問題で北京航空航天大学には願書を出さず、西北師範大学の入学試験を受けた。現在大学2年生であり、コンピュータを専攻としている。皆大学生になったら恋人がいるのに、息子はまだ恋人がいないので、少し心配になっている。恋人に関しては、ムスリム女性に限らず、誰でも人柄がよく、学歴の高い女性であればいいと思っている。しかし非ムスリム女性の場合には、相手がイスラーム教に帰依しなければならないという。

4.5 職業

臨夏州衛生学校で3年間勉強してから臨夏市医院に配属された。18歳のときから仕事をし始め、今年で勤務年数が27年になる。最初は救急科で働いたが、1987年から内科で、1995年からは手術室で働くようになる。二年間手術室で働いてからは小児科に配属される。小児科でも二年間働き、そのときは看護師長であった。1999年から計画免疫科で働くようになり、2008年1月までに続いた。計画免疫科での主な仕事は子供に予防接種を投与することである。

上司の命令で2ヶ月前から計画免疫関連の西関社区卫生サービスセンターで働くようになる。西関社区卫生サービスセンターは小さくて患者もあまり来ない診療所で、臨夏市医院のような大きい病院で働いたWさんにとって、西関社区卫生サービスセンターへの転勤はショックであった。今までWさんは臨夏市医院で働くことを自慢のことに思っており、多くの患者のために役立つことを嬉しく思っていた。イスラーム社会では女性が看護師や医師になることを勧めており、自分も仕事をし始めてから命の尊さや健康の大切さを認識するとともに、看護師の使命の重要性を分かるようになった。少しでも患者の救いになることを願っていたWさんにとって、患者もあまり来ない診療所への移動は悲しいのである。移動の原因について自分にもよく分からないが、これは上司の決定であるため、従わざるを得ない。最近ショックで気分が良くなく、仕事もしたくない。家でゆっくり休みたいが、夫の収入が低く、安定していないため、仕方なく仕事を続

けているという。

4.6 考察と分析

以上、Wさんのライフヒストリーについて論述してきた。Wさんは良い教育を受け、良い職に従事している。臨夏市のムスリム女性としては恵まれており、良いラインに立っていると言える。また、同級生である夫と結婚し、息子も大学生になり、幸せな生活を送るはずであるが、Wさんは満足を感じていないところが色々ある。誰でも自分の人生に百点満足することはなく、きっと不満を感じる場所があると予想されるが、Wさんの場合、不満を感じる場所は夫と職業である。

まず夫への不満は、第一に、収入が低く、安定していないこと、第二に、家事をあまり手伝わないこと、第三に、息子を甘やかすことである。Wさんの夫はリストラされた後に紳士服装店の経営をしており、収入はそんなに高くはないが、臨夏市では中等レベルの収入である。しかし、体裁がよくて老後の生活も保障できるWさんの仕事と比べると、紳士服装店の経営は少し遜色がある。臨夏市の多くの回族は商業を営んでいるが、それは政府機関や国営企業などで働くような鉄飯碗⁽¹¹⁾が見つからない場合の選択で、できれば鉄飯碗に就くのがいいと思っている。Wさんの夫は鉄飯碗を失ったあと、服装の商売をしているが、大儲けすることがなく、老後の生活も保障されていない。そのうえ、家事もあまり手伝わず、息子の教育方法も自分と異なるため、Wさんは夫の仕事に不満を持っている。しかし、Wさんの夫は育児の協力を積極的で、物事を決定するときにも妻の意見をよく参考している。この点においては、家事と育児を全部妻に任せ、自分ひとりで物事を決定する臨夏市の多くの回族男性とは異なっている。これは劣等感(仕事の面において妻に劣っている)からくるかもしれないが、少なくともここからは臨夏市の回族男性の変化を見ることができるだろう。

次に、職業についての不満は西関社区卫生サービスセンターへ転勤されたことで、一生懸命働いてきた自分がここに転勤された理由が分からなくて悔しい思いをしていることである。自分の仕事に誇りを持ち、まじめ

(11) 日本の「親方日の丸」にあたる言葉で、かつて国営企業等に見られた、解雇され食いはぐれる心配のない雇用待遇を指す。

に仕事をしてきたWさんにとって今回の転勤は大きな打撃であろう。Wさんが現実を見つめ、痛んだ心を癒すには時間がかかると思われる。Wさんの事例はただ一つの例ではあるが、ここから仕事熱心な回族女性像を見ることができるだろう。

5. おわりに

今まで自営業、臨夏中阿女校の職員、看護婦という異なる人生を歩んできた回族女性のライフヒストリーについて見てきた。上述の3名の回族女性は幼い時の家庭環境、教育レベル、夫との関係、職業の相違によって、歩んできた人生はかなり異なっている。

M1さんは、教育レベルが低く、社会には進出しているが、伝統的な性別役割分担に賛成している。彼女は知識がなく、「女性は内」という観念に賛成しているため、社会に進出したがっていないが、生活のために仕方なく社会労働に参加している。彼女は教育レベルが低いゆえ、レベルの高い社会労働には従事できず、レベルの低い単純労働に従事している。そのためM1さんは、肉体的苦痛と精神的苦痛の両方を感じている。

M2さんは教育レベルが低いですが、社会に進出しており、伝統的な性別役割分担に反対している。彼女は、教育レベルの低い自分に社会進出ができるとは思わなかったため、このようなチャンスを貴重に思い、仕事に一層努力し、自分の能力を社会に認めさせようとしている。社会的地位の高い仕事ではないが、ムスリム女性として給料をもらえる仕事を持つことを光栄に思っている。家庭内においては育児・家事を主に担当しており、家族からも尊敬されている。

Wさんは学歴が高く、社会にも進出しており、したがって伝統的な性別役割分担に反対している。彼女はプライドが高く、キャリアウーマンになっていることを自慢に思っており、責任のある仕事を任せられることを期待している。彼女は家庭内においては家事・育児をするなど良妻賢母であるが、社会に出るとキャリアウーマンになり、家庭と仕事の両立を図っている。Wさんは「女は内」のような女性の役割を家庭内だけに限定することに反対している。彼女は家庭内での地位はもちろん、社会的地位も高い。

このように、M1さん、M2さんとWさんは異なる人生を歩んできた。しかし、三者は同じ臨夏市に住んでいる45歳以上の回族女性としていくつかの共通点もみられる。

まず、第一に結婚年齢が早く、結婚の形も見合い結婚である⁽¹²⁾。イスラーム法において、女性の結婚最低年齢は9歳⁽¹³⁾であるが、現在多くのイスラーム国では、イスラーム法によらない。それにしても、結婚年齢は15歳から18歳程で早い。臨夏市の回族社会においても、中国の法定結婚年齢があるにも関わらず（男性が22歳、女性が20歳）、20歳未満で結婚する女性が多い。結婚においても恋愛結婚をすることはめったに見かけられなく、結婚相手を父母が決め、結婚前に相手の顔を見ることもないケースが多い。

第二に、結婚相手は同じ回族出身の男性である。臨夏市の回族社会ではいまだに民族内結婚（あるいはムスリム内結婚）を勧めており、ムスリムではない他民族との結婚は喜ばれない。ムスリムではない他民族と結婚する場合、相手は必ず洗礼を受け、ムスリムにならないといけない。

第三に、職業女性になることに賛成していながらも、家事と育児を主に担当するのは女性であると思っている。彼女たちがこのように思っているのは、イスラーム家族法の影響を受けたからだと思う。イスラーム家族法には妻に家事や子供の養育を義務付けているのである。

第四に、姑・舅か義理の兄夫婦との同居経験を持っている（M2さんは結婚当時に姑・舅がなくなったので除外）。回族は仲良く結束のとれた大家族を尊ぶため、三世代同居や四世代同居の家族が多く、結婚したら最初は姑・舅と同居するのが一般的である。

第五に、子供にイスラーム学校に通わせなく、普通学校、普通大学に通わせている。イスラーム学校に通うと就ける仕事の幅が限定されているため、普通の学校に入り、普通文化知識を吸収するほうがいいと思っている。子供への宗教教育は主に家庭教育により、子供に自分自身がムスリムであるということを認識させるぐらいである。

(12) 衛生学校を卒業したWさんが23歳に結婚した以外、残りの2人は20歳未満で結婚した。また、Wさんの夫は結婚前からの知り合いであったが、お互いに話したことがなく、親密ではなかった。2人が結ばれたのは親戚か友達の見合いによる。

(13) イスラームの預言者ムハンマドが少女アーイシャと結婚したときの年齢が各自53歳と9歳だったため、イスラーム法では女性の最低結婚年齢を9歳と決めている。

第六に、子供には宗教義務をあまり要求していないのに、自分自身は宗教義務を果たしている。例えば、礼拝をするとかメッカ巡礼に行くとか、イスラームの規定に則った生活を送っている。これは自らの世代の考え方・社会状況と、次世代が置かれた社会状況の違いを認識しているからだと思う。

以上、商人、宗教学校の職員、看護婦という45歳以上の臨夏市の回族女性の生き方の共通点をまとめてみた。とりあげた事例は少ないが、臨夏市の多くの回族女性の生き方は、このような共通点から大きく外れるものではないだろう。ただ年齢層が下がるにつれ若い世代の新しい生き方が見られることも確かである。上述の3例は45歳以上の比較的年輩者の事例だけに、古い生き方の伝統を示しているといえよう。

参考文献

- 高山龍太郎2000「不登校生の生活史：ある少女の事例」『富大経済論集』46（2）：229－268。
- 宝福則子1999「日常生活史 B女の場合：「1900年から1933年までのブラウンシュヴァイクにおける労働者の日常生活」（その二）」『小樽商科大学人文研究』97：243－272。
- 嚴汝嫻1986『中国少数民族婚姻家庭』中国婦女出版社。
- 中華人民共和国国家統計局2004『中国統計年鑑 2004』中国統計出版社。
- 中華人民共和国国家統計局2006『中国統計年鑑 2006』中国統計出版社。
- 張承志1993『回教から見た中国』中公新書。
- 陳東林&苗棣&李丹慧（編）西紀昭他（訳）1997『中国文化大革命事典』中国書店。
- 服部美奈2001『インドネシアの近代女子教育：イスラーム改革運動のなかの女性』勁草書房。
- 敏文杰2007「儒家“五倫”思想和劉智“五典”思想之比較」『回族研究』1：32－36。
- 馬国柱&虎有澤&張玉玲2004「黄土高原上の民族家庭研究—以張家川回族家庭為例」『西北民族大学学報』5：152—156。
- 松本ますみ2000「中国イスラーム新文化運動とナショナル・アイデンティティ」西村成雄編『ナショナリズム—歴史からの接近』東京大学出版会：99－125。
- 三田了一（訳）1983『聖クルアーン：日亜対訳注解』日本ムスリム協会。
- 山本須美子2003「民族的他者意識の形成過程：在日華僑女性のライフヒストリーの分析から」『人文学研究』6：225－248。
- 梁向明2007「略論回族伝統家庭倫理思想」『回族研究』1：37－44。

インターネット資料

http://www.lx.gansu.gov.cn/Article_Index.asM1（2008年9月18日参照）